

# フィードバック獲得のコストと知能の暗黙理論の関連

田崎 希実 (奈良女子大学 人間文化総合科学研究科, [yan\\_tasaki@cc.nara-wu.ac.jp](mailto:yan_tasaki@cc.nara-wu.ac.jp))

竹橋 洋毅 (奈良女子大学 人間文化総合科学研究科, [takehashi.hiroki@gmail.com](mailto:takehashi.hiroki@gmail.com))

The relationship between the costs of feedback seeking and the implicit theory of intelligence

Nozomi Tasaki (Graduate School of Humanities and Sciences, Nara Women's University, Japan)

Hiroki Takehashi (Graduate School of Humanities and Sciences, Nara Women's University, Japan)

## Abstract

This study examined the relationship between the costs of feedback seeking and the implicit theory of intelligence, a belief about the variability of ability. Feedback is widely regarded as an essential resource for learning and self-improvement, yet individuals often hesitate to seek it because of anticipated social or psychological costs. Based on a pilot survey to explore such costs of seeking feedback in Japan, we investigated whether undergraduates' implicit theory of intelligence was correlated with multiple aspects of feedback concerns in a hypothetical situation (Study 1,  $N=198$ ) and daily life (Study 2,  $N=196$ ). Exploratory factor analysis (Study 1) indicated that the costs of feedback seeking consist of seven distinct factors, highlighting the multidimensional nature of such concerns. In particular, the analyses showed that self-presentation concerns and ego threat are separate constructs, and this distinction was also confirmed in the confirmatory factor analysis (Study 2). Moreover, results consistently indicated that the fixed theory of intelligence was correlated with concerns about self-presentation, but not with other types of costs, such as the fear of failure. The discussion considers the influence of cultural background on the result, the theoretical contributions to motivation research, and applied implications for designing supportive educational and organizational environment.

## Key words

implicit theory of intelligence, feedback-seeking cost, motivation, proactive, self-regulation

## 1. 目的

フィードバックとは、目標を達成するためのリソースとして自分の行動に対して他者から受ける評価である。それを主体的に求める行動はフィードバック獲得と呼ばれる (Ashford & Cummings, 1983)。フィードバック獲得は課題のパフォーマンスとの正の関連 (Anseel et al., 2015) を示し、教育場面における重要な資質であると言える (文部科学省, 2015)。しかしながら、人はフィードバックを求めることに抵抗を感じることもある。本研究では、フィードバック獲得のためらいに違いが生じるのはなぜかという問いに焦点を当てる。

フィードバック獲得の重要な先行研究として、Ashford & Cummings (1983) が挙げられる。フィードバックはそれまで受動的に与えられるものであるとされてきたが、彼らは主体的に獲得されるものととらえ直し、自分へのフィードバックを監視する「モニタリング」と主体的に他者に意見を求める「問い合わせ」という2つの分類を提案している。この分類は、その後の研究でしばしば採用されている (e.g., Papi et al., 2020)。

フィードバック獲得の規定因としては、フィードバック獲得のコストと価値が指摘されている。コストはフィードバックの獲得をためらわせるネガティブな評価である。コストには、自身に対するネガティブなフィードバックを受け取ることに苦む自我のコスト (VandeWalle &

Cummings, 1997)、困難に直面している状況を他者にさらすことへの懸念である自己呈示のコスト (VandeWalle & Cummings, 1997)、フィードバック獲得にかかる手間などの負担である努力のコスト (Ashford & Cummings, 1983) などがある。価値は、フィードバックを求めるメリットの評価であり、パフォーマンス改善や成長 (VandeWalle & Cummings, 1997) が含まれる。コストと価値は動機づけの主要因であると一般に考えられているが (Eccles, 2005)、フィードバック獲得においてもコストと負に相関し、価値と正に相関することがメタ分析により示されている (Anseel et al., 2015)。

フィードバック獲得研究の近年の動向としては、フィードバックの処理の深さに関わるメカニズムを探る重要性が指摘され、動機づけ変数との関連が注目されている (e.g., Anseel et al., 2015)。客観的に同じフィードバックを受け取った場合でも、その人の信念や関心などの動機づけ状態が異なれば、フィードバックの処理の程度や方法、結果に違いが生じうる。特に、信念は外界の膨大な情報を単純化・整理し、判断や行動を方向づける心的フレームである (Crum et al., 2013)。したがって、フィードバック獲得の背景にある心的メカニズムについて検討する上では信念が重要な役割を果たす可能性が考えられる。

これに関し、Papi et al. (2019) は、第二言語学習におけるフィードバック獲得に焦点を当て、知能の暗黙理論との関連を検討した。知能の暗黙理論とは能力の可変性についての個人的な信念であり、能力を生まれつき変えられないものとみなす固定的知能観と、変えられるものとみなす増大的知能観からなる (Dweck & Yeager, 2018)。

困難に直面した際、固定的知能観をもつ人々は無力反応を示し、増大的知能観をもつ人々は粘り強さを示すことが多くの研究により示されている（レビューとしては、Dweck & Yeager, 2018; 2021）。これらの知見を踏まえ、Papi et al. (2019) はフィードバック獲得と知能観の関連を検討した。その結果、増大的知能観を持つ生徒は教師などにフィードバックの問い合わせやモニタリングを行いやすいのに対し、固定的知能観を持つ生徒はそうではないことを示唆した。

さらに、Papi et al. (2020) は、知能観がフィードバック獲得と関連するメカニズムについて検討している。彼らは、フィードバック獲得の先行研究において主要な変数としてみなされてきたフィードバック獲得のコストと価値を取り上げ、それらが前述の関係を媒介する可能性について調べている。その結果、固定的知能観はフィードバック獲得のコストと正に相関し、増大的知能観はフィードバック獲得の価値と正に相関していた。そして、フィードバック獲得の価値やコストはフィードバックモニタリングや問い合わせと関連していた。媒介分析の結果から、知能観がフィードバック獲得の価値・コストを媒介してフィードバック獲得に影響するというプロセスが示唆された。これらの結果は、知能観がフィードバック獲得をためらうコストや求める価値をとらえる上で有用な枠組みとなることを示す点で重要であるといえる。

しかしながら、知能の暗黙理論とフィードバック獲得の関連についての先行研究には、3つの未検討点が残されている。第一に、フィードバック獲得のコストが多面的にとらえられていない。Papi et al. (2020) では、コストとして自己呈示のコストだけが用いられ、価値としては改善への有益性や重要性が測定されている。フィードバックを求める理由（i.e., 価値）としては改善に有益であることが主要であると考えられるが、コストは価値よりも複雑で多様であるという知見（VandeWalle & Cummings, 1997）を踏まえると、コストを他者からの評価懸念だけにより測定することは妥当ではないといえる。Dweck (1999) は固定的知能観を持つ人が困難に直面した際に、他者からの評価懸念だけでなく、失敗そのものによる自我脅威や対処への効力感低下などの様々な無力反応を示すと想定している。したがって、知能観がどのようなコストと特に関連するのかについては検討の余地がある。第二に、Papi ら（Papi et al., 2019; 2020）が検討したフィードバック獲得の場面は第二言語学習のみであり、その他の場面については検討されていない。現代の心理学では、再現性と一般化可能性が重要視されており、他の全般的な目標追求場面について検討することは重要な課題であるといえる。第三に、Papi らの研究では、知能観とコスト・価値の単純相関だけを検証しており、代替説明の可能性が排除されていない。例えば、知能観が固定的であるほどコストが高いという相関が見られた際、それは知能観の効果ではなく、他の変数の交絡の可能性が考えられる。知能観の先行研究ではこの問題に対処するため、自己の有能性に関わる変数を測定し、その効果を統制するとい

うアプローチがとられてきた（Dweck, 1999）。代替説明の可能性について考慮されていない点は重要な未検討点であるといえる。

そこで、本研究では、フィードバック獲得をためらうコストについて多面的に測定した上で、それらと知能観の関連について検討することを目的とする。本研究では、フィードバックを主体的に求める「フィードバックの問い合わせ」場面に焦点を当てるが、これは改善を求めて自分から他者に声をかけることはパフォーマンス改善に役立ち（Anseel et al., 2015）、育成すべき資質としてみなされている（文部科学省, 2015）からである。フィードバック獲得についての先行研究では、元々ビジネス場面が想定されていたが、調査参加者が受講している授業場面や第二言語学習の場面など多様な場面が設定されるようになった（e.g., Ashford, 1986; VandeWalle & Cummings, 1997; Papi et al., 2020）。本研究では幅広い場面に適用可能な原理を探るため、フィードバック内容を限定せず、「自分にとって重要な目標で行き詰まった場面」という形で幅広い内容を含みうるように設定した。さらに、代替説明の可能性を排除するために、自尊心が低い人ほど否定的なフィードバックを避けるという知見（Ashford et al., 2003）を踏まえ、本研究では自尊感情を統制変数として測定した。

研究の概要を説明する。まず、フィードバック獲得をためらうコストについて幅広く収集した日本の研究が管見の限り見られなかったため、自由記述形式の予備調査を行った。それを踏まえ、研究1では架空のフィードバック場면을提示し、フィードバック獲得のコスト、知能観、自尊感情について評定を求めた。架空の場面への反応を扱ったのは、目標やフィードバック機会には個人差があると想定され、それらを統制しても、知能観とフィードバック獲得のコストの関連が見られるかを検討するためであった。研究2では、実際の日常場面を取り上げ、フィードバック獲得のコスト、フィードバックを求める相手の有無、知能観、自尊感情の評定を求めた。日常場面での反応についても扱うことで、研究の生態学的妥当性を高めることが可能となるとともに、知見の再現性を確認できると考えられる。

## 2. 研究1

### 2.1 目的

フィードバック獲得のコストを多面的に測定し、知能観との関連を検討することを目的とした。コストについては、現象探索に適した手法である自由記述形式の予備調査により質問内容を選定した。

### 2.2 方法

#### 2.2.1 調査対象者

探索的因子分析を行うため、調査対象者は200名を目標とした。最終的に集まった調査対象者は198名（女性196名、男性1名、その他1名）であり、平均年齢19.94歳、標準偏差1.38であった。

## 2.2.2 調査内容

知能の暗黙理論については、及川（2005）の暗黙の知能観尺度を用いた。及川（2005）では「才能」の語が用いられているが、場面に合わせて異なる語が用いられることがある（藤井・上淵, 2010）。本研究では目的に照らし、「能力」に変更して用いた。『能力』についてのあなたの考えを尋ねると教示した後、「私は一定の能力をもって生まれてきており、それを变えることは実際にはできない」など3項目について回答を求めた。評定は、6件法であった（1. 全くあてはまらない～6. とてもよくあてはまる）。評定値の平均を求め、尺度得点とした。信頼性係数 $\alpha$ は.83であった。

自尊感情については、桜井（2000）の自尊感情尺度を用いた。尺度は10項目であり、評定は5件法であった（1. 全くあてはまらない～5. とてもよくあてはまる）。評定値の平均を求め、尺度得点とした。信頼性係数 $\alpha$ は.89であった。

フィードバック獲得のコストについては予備調査を行った。外山他（2022）の作成手順を参考に、項目を作成した。大学生56名に対し、「あなたが『他者にフィードバックを求めた経験』についてお聞きます。フィードバックを求める行動とは、あなたにとって重要な目標に取り組んでいて、困難に直面したときに、自分の改善点についての意見をもらいに行くことです。」と教示したうえで、「あなたが他者にフィードバックをもらいに行くのをためらうことがあるとすれば、それはなぜですか。理由を教えてください。」と尋ねた。自由記述で回答を求めたところ、71件の回答が得られた。少人数を対象とした質的調査であり、プライバシーに配慮するために年齢と性別への回答は求めなかった。著者と大学院生1名がKJ法により分類した。その結果、「欠点の認識」、「自分自身に対する全般的な否定」、「現在の関係性」、「関係性悪化の回避」、「自分で取り組むことへの価値」、「フィードバックへの期待の低さ」、「自己理解の不足」の7つのカテゴリーが抽出され、これに基づいて研究1の調査項目が設定された。各カテゴリーにつき4項目ずつ、計28項目を作成した。フィードバックの送り手に関して、Papi et al.（2020）では教師や他者としていたが、全般的な目標追求場面を扱うため本研究ではパフォーマンス改善に寄与すると考えられる指導者を設定した。「あなたにとって重要な目標に取り組んでいて行き詰まったとき、先生やコーチなどの指導者にフィードバック（現在のパフォーマンスについての意見や評価）を求めるかどうか迷っているとしたら、フィードバックを求めるかどうか迷っている理由として、あなたは以下のような感情、考えを抱えますか。」という教示文のもと、6件法（1. 全くあてはまらない～6. とてもよくあてはまる）で回答を求めた。

## 2.2.3 手続き

Google Formsを用いたインターネット上での調査を実施した。近畿圏内にある大学において、授業を受講している大学生に倫理的配慮についての説明を行った上で調

査協力への依頼を実施した。

## 2.2.4 倫理的配慮

本研究は著者の所属大学における倫理審査委員会により研究実施の承諾を得た後、実施された（承認番号23-31）。

## 2.2.5 分析方法

分析には清水（2016）のHADon18\_002を用いた。

## 2.3 結果

### 2.3.1 フィードバック獲得のコストの因子分析

フィードバック獲得のコストの28項目について、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。因子数は、固有値の減衰パターンならびに対角SMC平行分析では7因子、MAPでは5因子が提案された。外山他（2022）は解釈可能性から示された最大因子数を採用していることを参考に、フィードバック獲得のコストを多面的にとらえるため7因子を採用した。ただし、不適解となったため、最小二乗法に変更し、因子分析を行った。因子負荷量が.40未満の項目ならびに複数の項目に.40以上の因子負荷量を示した項目を分析から除外した結果、25項目が残った。回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表1に示す。

因子分析の結果は概ね、項目を作成する段階で設定したカテゴリーの内容に相当していた。項目内容と照らし合わせ、因子Ⅰから因子Ⅶをそれぞれ、「質問への自信のなさ」、「関係悪化」、「自己呈示への懸念」、「有効性への疑念」、「自己鍛錬価値」、「相手の苦手さ」、「自我脅威」と命名した。

信頼性係数 $\alpha$ については、因子ⅠからⅥは.76から.93の値を取り、満足しうる信頼性が認められた。因子Ⅶのみ.69とやや低い値であった。因子ごとに評定値を平均して、因子得点とした。

### 2.3.2 知能観とフィードバック獲得のコストの関連

記述統計量と相関係数を表2に示す。固定的知能観は、フィードバック獲得のコストのうち自己呈示への懸念と有意な正の相関が見られた（ $r = .22, p = .002$ ）。一方で、その他のコストとは有意な相関が見られなかった。

自尊感情を統制した上で知能観とフィードバック獲得のコストとの関連を検証するために、フィードバック獲得のコストを従属変数とする重回帰分析を各々行った（表3）。その結果、自己呈示への懸念、関係悪化、質問への自信のなさを従属変数とした分析では回帰モデルが有意となったが、その他のコストを従属変数とした分析では非有意となった。回帰モデルが有意であったもののうち、固定的知能観との関連がみられたのは自己呈示への懸念のみであり（調整済み $R^2 = .04, p = .007$ ）、固定的知能観を持つ人ほど自己呈示への懸念を感じやすかった（ $\beta = .21, p = .003$ ）。

表 1：フィードバック獲得のコストについての因子分析結果

	I	II	III	IV	V	VI	VII
I. 質問への自信のなさ							
自分の状況を理解できておらず、質問できない	.91	.00	.08	-.09	.01	.00	-.10
的確な質問ができるか自信がない	.90	-.03	.06	.00	.08	.00	-.10
具体的な質問を考えることが難しい	.85	.00	-.17	.00	-.03	.01	.22
何を質問していいかわからない	.85	.05	-.01	.10	-.07	-.03	.00
II. 関係悪化							
相手に迷惑をかけたくない	-.04	.86	-.16	-.04	.04	-.07	.04
相手の時間を割いてもらうことに抵抗がある	.05	.76	-.09	-.08	.17	.15	-.03
相手に嫌われたくない	-.03	.55	.16	.05	-.08	-.16	.09
そんなことで悩んでいるのかと相手に失望されたくない	.13	.48	.22	.05	-.03	.05	-.04
III. 自己呈示への懸念							
自分に対する悪い評価を得るのが怖い	.02	-.11	.87	-.02	.03	-.06	.07
自分自身に対する相手からの厳しい意見を聞くとショックだ	.05	-.21	.83	-.03	.08	.02	.00
相手に自分自身を否定されるのが怖い	-.10	.08	.69	.04	-.04	-.01	-.02
相手に自分の行動を非難されそうで不安だ	-.01	.36	.60	.01	-.08	.09	-.10
IV. 有効性への疑念							
納得できるフィードバックをもらえないかもしれないと思う	.01	-.03	-.04	.93	-.04	-.03	.08
もらったフィードバックが参考になるかわからないと思う	.01	.00	-.02	.84	-.01	.03	-.11
的外れなフィードバックをもらって困りたくない	-.03	-.04	.08	.56	.13	.09	.06
V. 自己鍛錬価値							
他の人の力を借りず、自分で取り組むことに価値がある	-.04	-.05	.05	-.05	.72	.09	.05
自分の力で乗り切ることがベストだと思う	.03	.02	.01	.03	.71	-.02	.15
自分で改善のために取り組むべきことがあると思う	-.04	.09	.01	-.02	.60	-.10	-.11
他者に助けを求める前にもっと自分でできることがありそうだと思う	.03	.07	-.04	.11	.54	-.07	-.11
VI. 相手の苦手さ							
相手は自分にとって苦手な人物である	.03	-.09	-.04	-.08	-.04	.81	-.02
相手は自分とあまり親しくない人物である	-.03	.00	.05	-.02	-.06	.78	.07
相手は自分にとって信頼のおけない人物である	-.05	.00	-.06	.16	.01	.63	-.14
相手は自分と心の距離のある間柄である	.01	.08	.04	.04	.05	.61	.10
VII. 自我脅威							
自分の改善点と向き合うのは怖い	-.02	-.01	.00	.01	.01	.02	.82
自分ができていないことを人に知られるのは恥ずかしい	.01	.14	.27	.00	-.03	.02	.47
因子間相関							
因子 II	.41						
因子 III	.11	.26					
因子 IV	.19	.21	.24				
因子 V	.10	.49	.08	.27			
因子 VI	.10	-.14	.01	.29	-.16		
因子 VII	.28	.23	.48	.20	.06	-.08	

## 2.4 考察

本研究の目的は、フィードバック獲得のコストを多面的に測定した上で、知能観とコストの関連を検討することであった。

まず、フィードバック獲得のコストの因子構造に着目すると、探索的因子分析の結果から 7 因子が抽出された。探索的な検討により得られた項目のまとまり方は、一部従来のコストや価値と類似していた (VandeWalle & Cummings,

1997)。「自己呈示への懸念」は自己呈示のコストに、「自我脅威」は自我のコストに類似した内容が見られた。これら 2 つは別の因子として抽出されたことから、異なる構成概念である可能性が示唆された。即ち、ネガティブなフィードバックへの脅威であってもそれが他者からの評価に対するものであるか、自己の中で処理することに対するものであるかは異なる意味を持つ可能性がある。また、「有効性への疑念」はフィードバックそのものに対する評



表 2：記述統計量と相関係数

研究 1	平均値	標準偏差	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 固定的知能観	3.15	1.05	—							
2. 自尊感情	3.14	0.84	-.19 **	—						
3. 自己呈示への懸念	4.54	1.07	.22 **	-.08	—					
4. 自我脅威	4.05	1.32	.09	-.09	.48 **	—				
5. 相手の苦手さ	3.59	1.11	.03	.00	.01	-.04	—			
6. 関係悪化	4.01	1.22	.12	-.44 **	.29 **	.29 **	-.12	—		
7. 有効性への疑念	2.92	1.21	.00	-.08	.22 **	.20 **	.28 **	.18 *	—	
8. 自己鍛錬価値	3.72	1.01	.08	-.11	.10	.10	-.15 *	.43 **	.25 **	—
9. 質問への自信のなさ	4.06	1.42	.05	-.34 **	.09	.24 **	.08	.38 **	.16 *	.10
研究 2	平均値	標準偏差	1	2	3	4	5			
1. 固定的知能観	3.23	1.11	—							
2. 自尊感情	3.02	0.86	-.18 *	—						
3. 自己呈示への懸念	4.48	1.18	.22 **	-.25 **	—					
4. 自我脅威	4.10	1.25	.15 *	-.14	.68 **	—				
5. 有効性への疑念	3.20	1.22	.04	.01	.31 **	.27 **	—			
6. フィードバック機会	4.04	1.09	-.01	.13	-.13	-.07	-.02	—		

注：\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ 。

価のことであった。これは、フィードバックの実用性の評価を含むフィードバックの価値 (Ashford, 1986) に類似した内容であり、コストにおいてもフィードバックそのものの評価は重要な側面であることが考えられる。

次に、固定的知能観とコストとの関連について相関分析を行った結果、固定的知能観と自己呈示のコストのみが正に関連していた。重回帰分析により自尊感情による代替説明を排除しても、この関連は見られたことから、固定的知能観を持つ人ほど自己呈示の懸念を感じやすいことが示唆された。これは、固定的知能観と自己呈示のコストの正の関連を見出した Papi et al. (2020) の知見と整合的であった。一方で、固定的知能観は自我脅威とは有意な関連が見られなかった。固定的知能観を持つ人が自分の中で改善点に向き合うことそのものというより、他者に言及されることに強く恐れを抱く可能性があると考えられる。

知能の暗黙理論に関する従来の先行研究において、失敗そのものへの忌避と他者意識から生じる失敗への忌避は分けて扱われてこなかった。失敗への忌避感との関連について検討するために典型的に扱われる変数として、悪い成績を避けたいという遂行回避目標があるが (Dweck & Yeager, 2021)、他者意識から生じる志向性であるかどうかについては明示されていなかった。Papi et al. (2020) では自我脅威にあたる内容は測定されず、他者からの評価懸念についての自己呈示のコストとの関連のみが検討された。本研究では、これら 2 つのコストを分けて測定したことで、失敗を避けたいという点では同じでも、対他的なネガティブ感情と自己の中でのネガティブ感情には異なる意味がある可能性を見出した。Dweck らによる一連の知能観研究では達成目標などの指標が理論ベース

で作成されたものが多く (Dweck & Yeager, 2018)、本研究のように自由記述調査に基づいて現象ベースの指標を使用した量的研究は管見の限り見られない。本研究の手法の新規性が先述の知見の発見につながったと考えられる。

ただし、研究 1 には制約がある。まず、本研究では自我脅威に因子負荷量の低い項目として対他的な内容を含むものが存在しており、この因子が個人内でのネガティブ感情を表しているかは不明瞭であった。このため、質問項目の表現を改めることでその違いを明確にする必要があると考えられる。自我脅威と自己呈示のコストの違いを明確にしたうえで知能観との関連を検討することは重要であるだろう。また、本研究は参加者にフィードバック獲得をためらうという架空場面を想定させたことから、現実場面をとらえきれているとは言い難い。この生態学的妥当性を考慮し、現実場面でも同様の結果がみられるかを検討することが重要であると考えられる。そこで、研究 2 では、先述の問題を踏まえ、自我脅威と自己呈示への懸念をそれぞれ内的なものとして対他的なものとして区別し、項目を修正したうえで研究 1 と同様の結果が見られるかを検討する。そして、普段の行動を問い、架空の場面ではなく現実場面について検討する。

### 3. 研究 2

#### 3.1 目的

日常場面におけるフィードバック獲得について尋ね、フィードバック獲得のコストと知能観の関連を検討することを目的とした。特に、自我脅威と自己呈示への懸念の関連パターンが再現されるかに焦点をあてた。さらに、フィードバックそのものに対する実用性の観点からの評価は重要であると考えられること (e.g., Anseel et al., 2015)

から、唯一フィードバックそのものへの評価にあたる内容として見いだされた有効性への懸念との関連も検討した。本研究では、自我脅威と自己呈示への懸念の違いの検証が主目的であることを踏まえ、回答者の負担軽減の観点から使用する因子を厳選し、これらの3因子を用いた。自我脅威と自己呈示の懸念については、項目の修正と追加を行った。また、研究2では日常場面について検討することから、フィードバックを求める機会の個人差を統制するための質問項目を追加した。研究1の結果に基づき、仮説について述べる。固定的知能観と自己呈示への懸念には正の関連が見られるだろう。

## 3.2 方法

### 3.2.1 調査対象者

探索的因子分析を行うため、調査対象者は200名を目標とした。最終的に集まった調査対象者は、近畿圏内の大学生196名（女性194名、回答しない2名）であり、平均19.88歳、標準偏差1.47であった。

### 3.2.2 調査内容

暗黙の知能観、自尊感情については研究1と同様であった。信頼性係数 $\alpha$ は、暗黙の知能観が.80、自尊感情が.90であった。評定値の平均を尺度得点とした。

フィードバック機会については、フィードバックを求める相手がいるかどうかについて尋ねた。「あなたの周りには、フィードバック（あなたのパフォーマンスについての意見や評価）を与えてくれる人はいますか。」という1項目について6件法（1.全くいない～6.たくさんいる）で回答を求めた。

フィードバック獲得のコストについては、研究1の因子分析の結果をもとに「自己呈示への懸念」4項目、「自我脅威」4項目、「有効性への懸念」3項目の計11項目を使用した。「自我脅威」について、「恥ずかしい」という文言は対他的な感情であることから、項目を修正した。因子負荷量の高かった項目と自我のコスト（VandeWalle & Cummings, 1997）の説明を参考に、「自分ができていないことを実感するのはつらい」、「自分の欠点をみつめなおすのは怖い」、「自分の不出来さに直面するのが不安だ」とした。フィードバックを求める相手に関して、調査対象である大学生にフィードバックの送り手として指導者が存在するかには個人差があると考えられることから、指導者に代わるものとして「自分よりも優れた人」に変更した。研究1と同様の教示を行った上で、6件法で回答を求めた。

### 3.2.3 手続き

Google Formsを用いたインターネット上での調査を実施した。近畿圏内にある大学において、研究1と同様に調査協力への依頼を実施した。

### 3.2.4 倫理的配慮

本研究についても、著者の所属大学における倫理審査

委員会により研究実施の承諾を得て実施された（承認番号23-43）。

## 3.3 結果

### 3.3.1 フィードバック獲得のコストの確認的因子分析

項目の修正を行った自我脅威と自己呈示への懸念が再度別因子として抽出されるかを検証するため、確認的因子分析を行った。星野他（2005）を参考に、適合度指標としてCFI、SRMR、AICを参照した。分析の結果、自己呈示への懸念、自我脅威、有効性の懸念を弁別した3因子モデルの適合度は $\chi^2(41) = 121.08$  ( $p < .001$ )、CFI = .94、SRMR = .07、AIC = 171.08であった。自己呈示への懸念と自我脅威がフィードバック獲得の際の脅威としてまとまった2因子モデルの適合度は $\chi^2(43) = 232.74$  ( $p < .001$ )、CFI = .85、SRMR = .08、AIC = 278.74であった。コストとしてまとまった1因子モデルの適合度は $\chi^2(44) = 342.81$  ( $p < .001$ )、CFI = .76、SRMR = .11、AIC = 386.81であった。3因子モデルが最も適合度が高かったため、3因子モデルを採択した。信頼性係数 $\alpha$ は、自己呈示への懸念が.87、自我脅威が.90、有効性への懸念が.76であった。因子ごとに評定値の平均を求めることで、尺度得点とした。

### 3.3.2 知能観とフィードバック獲得のコストとの関連

各変数の記述統計量と相関係数を表2に示す。相関分析の結果、固定的知能観はコストのうち自己呈示への懸念 ( $r = .22, p = .002$ )、自我脅威 ( $r = .15, p = .037$ ) と有意な正の相関が見られた。

自尊感情とフィードバック機会を統制した上での関連を検証するため、コストを従属変数とする重回帰分析を行った（表3）。その結果、自我脅威と有効性への懸念を従属変数としたモデルは非有意であり、自己呈示への懸念を従属変数としたモデルのみ有意であった（調整済み $R^2 = .09, p < .001$ ）。固定的知能観 ( $\beta = .18, p = .010$ ) と自尊感情 ( $\beta = -.21, p = .003$ ) それぞれに有意な関連がみられた。

## 3.4 考察

研究2では、日常場面におけるフィードバック獲得のコストと知能観との関連を明らかにすること、特に自己呈示への懸念と自我脅威についてどのような関連が見られるかを検討することを目的とした。まず、確認的因子分析の結果について述べる。1因子、2因子、3因子の適合度を比較した結果、3因子が最も適合度が高かったため、3因子モデルが採用された。この結果から、自己呈示の懸念と自我脅威、有効性への懸念が異なる構成概念であることが再度示された。

知能観とコストとの関連について重回帰分析を行った結果、固定的知能観と自己呈示への懸念には有意な関連が見られた。この結果から、仮説は支持された。研究1で示唆された結果と同様に、固定的知能観を持つ人は自分の未熟な部分が他者にさらされるときにより脅威を感

表3：フィードバック獲得のコストを従属変数とした回帰分析の結果

従属変数	固定的知能観	自尊感情	フィードバック機会	Adjust $R^2$
$\beta$				
研究 1				
自己呈示への懸念	.21 **	−.04		.04 **
自我脅威	.07	−.08		.00
相手の苦しさ	.03	.00		−.01
関係悪化	.04	−.44 **		.19 **
有効性への疑念	−.02	−.08		.00
自己鍛錬 価値	.06	−.09		.00
質問への自信のなさ	−.02	−.34 **		.10 **
研究 2				
自己呈示への懸念	.18 *	−.21 **	−.11	.09 **
自我脅威	.13	−.11	−.05	.02
有効性への疑念	.04	.02	−.02	−.01

注：\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ 。

じる可能性があると考えられる。本研究においても、自己呈示への懸念と自我脅威は知能観と異なる関連を持つことが示された。有効性への疑念と知能観が関連しないことも繰り返し示された。Papi et al. (2020) では固定的知能観と増大的知能観を分けて測定し、後者がフィードバックの価値と相関することを示した。本研究で測定された有効性への疑念は価値の低さと関連すると考えられることから、今後は増大的知能観も測定し、関連を検討することが求められる。

#### 4. 総合考察

本研究では、フィードバック獲得のコストと知能観の関連を検討することを目的とした。研究1では架空の場面、研究2では日常場面における反応について検討した。

まず、研究1、2で共通して示された主な結果を述べる。1点目として、コストの因子構造に関し、自己呈示への懸念と自我脅威は弁別されることが示された。これは、VandeWalle & Cummings (1997) における自我のコストと自己呈示のコストの古典的な分類に一致する。実証研究でコストを扱う際、自我のコストを取り上げず自己呈示のコストを扱うことがほとんどであったが (e.g., Papi et al., 2020)、これらを別の概念として扱うことの重要性が示されたと考えられる。その上で、これまで直接検討がなかった自我脅威と知能観の関連について検討することができた。2点目として、固定的知能観は自己呈示への懸念との有意な関連が見られたが、自我脅威とは関連が見られなかった。これは、知能観と自己呈示のコストの関連を示した Papi et al. (2020) を再現するものであった。この結果から、固定的知能観は対他的なネガティブ感情と関連しやすく、遂行回避の志向性としてひとまとめにされていた脅威 (Dweck & Yeager, 2021) には異なる意味がある可能性が示された。知能観と自己呈示への懸念についての先行研究との一貫した結果から、失敗が他者に

さらされることへの脅威は文化によらず重要である可能性が考えられる。このことは集団内での失敗のしづらさに影響を与える可能性があり、社会的存在である人間にとって集団内での悪い評判が不適応につながるという議論 (山岸, 1998) とも整合的であると考えられる。また、本研究では自我脅威を独自に測定し、そちらでは知能観との関連が見られなかった。この結果が、知能観が失敗そのものへの脅威を予測するわけではないことを示すのか、あるいは文化差があり日本でのみそのような傾向が見られることを示すのかについては、更なる検討が必要であると考えられる。本研究の結果は、コストの多様な側面と知能観の関連について検討したことで得られた新たな示唆であるといえる。

本研究の意義を述べる。理論的意義としては、知能観研究において分けて扱われることがなかった、対他的なネガティブ感情と自己の中でのネガティブ感情の違いについて新たな示唆が得られた。知能観研究では個人内に閉じた行動との関連が検討されることが多く (Dweck & Yeager, 2021)、この違いを明確にした検討はされてこなかった。固定的知能観を持つ人が他者からの評価懸念を感じやすいという傾向は、フィードバック獲得のような対人相互作用場面だけではなく、個人内に閉じた行動であっても重要であることが考えられる。応用的意義としては、個人がフィードバックの獲得をためらう心理的要因やそのメカニズムについての知見が得られたことで、積極的にフィードバックを求められる環境づくりや指導・支援方法の開発に寄与する可能性が考えられる。

本研究の制約を述べる。第一に、コストの指標が十分に妥当性の確認されたものではないことが挙げられる。予備調査の教示や先行研究との整合性 (VandeWalle & Cummings, 1997) から内容的妥当性は担保されており、先行研究 (e.g., Schroder et al., 2015) において採用されている分析手法を用いているが、結果を解釈する上では、妥



当性がよく確認された尺度を用いる方がより好ましいと考えられる。第二に、本研究で扱った場面設定が抽象的であったために、改善点の指摘を求めようとする場面であるという状況特性をうまく扱えていなかった。フィードバック獲得が、結果を確認するためのものではなく、改善点の指摘であることを明示した場合についても検討する必要があるだろう。第三に、大学生を対象としたことによるサンプルの偏りが挙げられる。困難に直面しやすい学業上の移行期には知能観の効果が見られやすい可能性があり、中学一年生や高校一年生などを対象とした検証は重要であると考えられる。また、フィードバック獲得という現象は就労場面でも見られるものであり、知見の実践的示唆を高める上で、就労者においても同様の結果が見られるかを検証する必要があると考えられる。第四に、因果関係の検討ができていないことなどの検証方法に由来する制約が存在する。今後は、これらについて検討していくことが重要であろう。

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 22K03032 の助成を受けた。

## 引用文献

- Anseel, F., Beatty, A. S., Shen, W., Lievens, F., & Sackett, P. R. (2015). How are we doing after 30 years?: A meta-analytic review of the antecedents and outcomes of feedback-seeking behavior. *Journal of Management*, 41, pp. 318-348.
- Ashford, S. J. & Cummings, L. L. (1983). Feedback as an individual resource: Personal strategies of creating information. *Organizational Behavior & Human Performance*, 32, pp. 370-398.
- Ashford, S. J., Blatt, R., & VandeWalle, D. (2003). Reflections on the looking glass: A review of research on feedback-seeking behavior in organizations. *Journal of Management*, 29, pp. 773-799.
- Crum, A. J., Salovey, P., & Achor, S. (2013). Rethinking stress: The role of mindsets in determining the stress response. *Journal of Personality and Social Psychology*, 104, pp. 716-733.
- Dweck, C. S. (1999). *Self-theories: Their role in motivation, personality, and development*. Psychology Press.
- Dweck, C. S. & Yeager, D. S. (2018). Mindsets change the imagined and actual future. In G. Oettingen, A.T. Sevincer, & P. Gollwitzer (Eds.), *The psychology of thinking about the future*. Guilford Press.
- Dweck, C. S. & Yeager, D. S. (2021). A growth mindset about intelligence. In G. M. Walton & A. J. Crum (Eds.), *Handbook of wise interventions: How social psychology can help people change* (pp. 9-35). Guilford Press.
- Eccles, J. S. (2005). Subjective task value and the eccles et al. model of achievement-related choices. In A. J. Elliot & C. S. Dweck (Eds.), *Handbook of competence and motivation* (pp. 105-121). Guilford Publications.
- 藤井勉・上淵寿 (2010). 潜在連合テストを用いた暗黙の知能観の査定と信頼性・妥当性の検討. *教育心理学研究*, 58, pp. 263-274.
- 星野崇宏・岡田謙介・前田忠彦 (2005). 構造方程式モデリングにおける適合度指標とモデル改善について—展望とシミュレーション研究による新たな知見—. *行動計量学*, 32 (2), pp. 209-235.
- 文部科学省 (2015). 教育課程企画特別部会 論点整理「1. 2030 年の社会と子供たちの未来」. [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364306.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364306.htm). (閲覧日: 2024 年 11 月 6 日)
- 及川昌典 (2005). 知能観が非意識的な目標追求に及ぼす影響. *教育心理学研究*, 53, pp. 14-25.
- Papi, M., Bondarenko, A. V., Wawire, B., Jiang, C., & Zhou, S. (2020). Feedback-seeking behavior in second language writing: Motivational mechanisms. *Reading and Writing: An Interdisciplinary Journal*, 33, pp. 485-505.
- Papi, M., Rios, A., Pelt, H., & Ozdemir, E. (2019). Feedback-seeking behavior in language learning: Basic components and motivational antecedents. *Modern Language Journal*, 103, pp. 205-226.
- 桜井茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. *筑波大学発達臨床心理学研究*, 12, pp. 65-71.
- Schroder, H. S., Dawood, S., Yalch, M. M., Donnellan, M. B., & Moser, J. S. (2015). The role of implicit theories in mental health symptoms, emotion regulation, and hypothetical treatment choices in college students. *Cognitive Therapy and Research*, 39, pp. 120-139.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD—機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案—. *メディア・情報・コミュニケーション研究*, 1, pp. 59-73.
- 外山美樹・長峯聖人・浅山慧 (2022). 人は努力をどう捉えているのか—努力についての信念尺度の作成—. *教育心理学研究*, 70, pp. 19-34.
- VandeWalle, D. (2003). A goal orientation model of feedback-seeking behavior. *Human Resource Management Review*, 13 (4), pp. 581-604.
- VandeWalle, D. & Cummings, L. L. (1997). A test of the influence of goal orientation on the feedback-seeking process. *Journal of Applied Psychology*, 82, pp. 390-400.
- 山岸俊男 (1998). 信頼の構造—こころと社会の進化ゲーム—. 東京大学出版会.

受稿日: 2025 年 8 月 21 日

受理日: 2025 年 9 月 22 日

発行日: 2025 年 12 月 25 日

Copyright © 2025 Society for Human Environmental Studies



This article is licensed under a Creative Commons [Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International] license.



<https://doi.org/10.4189/shes.23.163>